

# 利根川新紀行 風情を楽しむ「財産」 坂のある街

2012年(平成24年)4月17日 火曜日 13版 第2次版 28

## 風情楽しむ「財産」

### 坂のある街



利根川沿いの取手駅渡口。

右手に「徳助坂」と呼ばれる坂道が延びる。昔、徳助という人が住んでいたとか、徳助という人が前をつつた場所とか、徳助はいくつかあるもの、由緒は定かでない。7年前、その坂道を上ったところに残っていた取手生協の「廃産」で、住民や行政、東武東上線が共同企画した「取手アートのプロジェクト」が催された。

「取手の愛道愛好会」は当時、旧壁に駅周辺のジオラマを展示し、「坂のある街」を紹介した。このとき、PR用に製作した「徳助坂」と書かれた木製の道標が、今も現地にあって、愛道愛好会の代表、酒井達夫さん(73)は、坂道の途中で立ちどまり、「これでいい」と指さした。道標は、ガードレールに支えられるように立っていた。

利根川と小舟川に挟まれた取手市には、多くの坂道が残っている。利根川沿いの取手駅渡口。右手に「徳助坂」と呼ばれる坂道が延びる。昔、徳助という人が住んでいたとか、徳助という人が前をつつた場所とか、徳助はいくつかあるもの、由緒は定かでない。7年前、その坂道を上ったところに残っていた取手生協の「廃産」で、住民や行政、東武東上線が共同企画した「取手アートのプロジェクト」が催された。



取手駅の渡口「徳助坂」の一角

このうち、名前がついている坂道は、わずか20、60、80代の15人の会員たちは、坂道を清掃しながら愛称をつき、徳助坂には昨年、木の道標をほぼ別に立派な石の道標も立てた。

坂を上り降り、JR常磐線と関東鉄道常磐線をまたぐ「よつやばし」を渡る。この路線橋の中ほどで、酒井さんは周回の歴史をひもといた。

「道なりに、2本の鉄道が分かれてY字形になった『中洲』が見えますね。あそこが、井野台緑地公園です。小さな公園で、看板もありませんが、このあたりは『福寿台』と呼ばれています」

緑地沿いにある取手一筋の板取の出口は「福寿台」と呼ばれる。文化祭は「福寿祭」と呼ばれる。「学校関係者の集まりもあって、隣街から取手駅の渡口に下る坂道を「福寿坂」と命名しました」

無評を下さると、真新しい高層マンションがそびえ、その裏手にも、名前のない細い坂道が続いていた。

真口の駅前通りは「さくら坂」。しかし、坂は、坂の上の方に数本しか見えない。昔の桜並木の多様です。坂の向こうは江戸時代、佐倉藩の飛び地でした。根と佐倉を分け合っていた「さくら坂」は、開闢後に住居からマウンテンをとって名づけました。

盛大行事のバス停を過ぎ、さくら坂と交わる。かつての「佐倉道」に目を向けた。愛道会が市内に新設した坂道の道標は4カ所に点検する。ほかにも、昔からある坂道の道標が、お倉道沿いに残っている。

佐倉藩の狭い道には、首領廟に連なる「坂道群」が多く残っています。その一角に、「地坂」「福寿六年」と刻まれた高さ10センチほどの道標があった。もう一つは「神明坂」「大正三年」と彫られた新設坂の道標だ。

利根川の渡船場から眺める坂

な陸路の「しりしり」石畳を背に赤い円柱のポストが立ち、あたりにには緑豊かな坂道が続く。

「雲天の取手キャンパスがある小文部地区にも坂道が多く見られます。しかも、ほとんどどの坂道には、すでに名前がついています。ちょっと行ってみますか」

いったん、駅近くの取手支店に戻り、車を利根川沿いに走らせた。

小文部地区の入り口は「福寿坂」。利根川に向かう出口は「徳助坂」。途中、横道に入ると、「産道門坂」「赤四郎坂」といった産道がついた坂道が入り組んでいた。大目如來をまつた祠から延びる「大目坂」を下ると、桜花がトンネルのように覆う坂道を抜ける。と、「相馬三万石」と称される水田が広がり、真波山のシルエットが青く、遠くに見えた。

街中ではほとんど見かけなくなったスヌメが、坂道を下った先の裏道に群れ、農家の原風景を醸し出す。

「会の名称から坂道を取れば取手の愛道会となります。坂道をキーワードに古里の景観や風情を楽しむ。坂道を市民の共有財産として大切にしていきたいと思えます」

助手席の酒井さんは、愛道会の所管方針を語り続ける。白いモクシンの花が背に映える。葉巻の袋が持ち、花びらしたツバキの大輪が道端を赤く染めていた。

(佐倉藩)



階段状の「神明坂」(左) ずれも取手の取手2丁目